〈近世女性史資料(17)〉

女大學教文庫 (2)

― 書誌・翻刻 ―

黄 色 瑞 華[*1]
若 林 俊 英[*2]

＜Early Modern Women’s History Research Materials(17)＞
ONNA DAIGAKU OSHIE BUNKO(2)
—Text and Bibliography—

……OHSHIKI Zuike*1
WAKABAYASHI Toshihide*2

＊1　城西大学客員教授・主任研究員
＊2　城西大学教授

一　書　誌

所蔵　城西大学国際文化研究所

書型　半紙本一冊。縦二四・九センチ。横一七・五センチ。

表紙　厚紙の上に鉄紺色無地極薄紙を貼る。ただし、少々湮滅。中央上部に「世の婦女の翫弄に備ふ書籍のあまた云々」の貼紙。

題簽　左肩。白紙四周枠。縦一五・九センチ。横三・八センチ。『女大學教文庫』

綴糸　白色綿糸二本掛。ただし、後綴。

内題　女大學

丁数　全三八丁。墨付七六面。

各面　六行（本文）。

柱刻　各面に「口の一」「口の二」、「壱」「弐」「三」「四」……「三十六終」。

匡郭　縦一二・八センチ。横一四・八センチ。

注　本文末尾に「益軒貝原先生述」。

奥付　天保十四年癸卯七月
江戸日本橋通壹丁目
須原屋茂兵衛
同　弐丁目
山城屋佐兵衛
同　浅草芽町二丁目
須原屋伊八
同　芝神明前
岡田屋嘉七
同　中橋廣小路
西宮弥兵衛
大坂心斎橋久宝寺町
堺屋新兵衛
同　安堂寺町心斎橋
播磨屋理助版

書肆

二　翻　刻

凡例

1　『女大學教文庫』の忠実な翻刻を旨とする。

2　使用漢字は可能なかぎり原形のままとし、原本の面影を伝えるように配慮する。

3　漢字ルビはすべて原本のままとする。

4　行移りもすべて原本のままとし、丁移り、表裏の別は、」一オ・』一ウを以って示す。

5　挿絵は適宜省略し、翻刻文中にその旨を示す。

承前

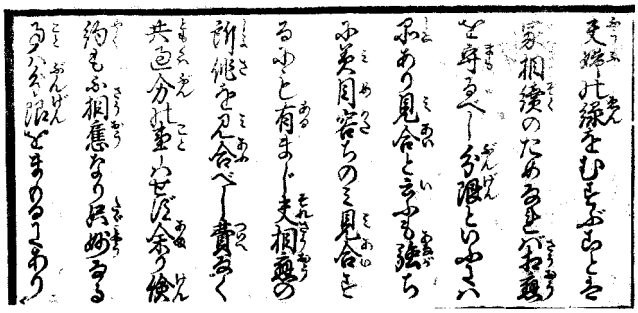
孟宗　此人ハ玄冬の最中に母病氣に臥好めるものとて笋をもとむ天子一孝を感通有けん荊中に餘の笋を生す孟宗悅びて持帰り母にまいらせけるが病氣も頓に全快し年齢もいと久しかりけるとぞ

丁蘭　丁蘭ハ河内の野王と云所の人なり母におくれて木像を刻ミ朝暮生るが如く給仕なしける妻過て木像の面を火

にて燃す妻の黒かミ日を追て落はげたり丁蘭夫婦わびことなせバ一夜の間元の如生たり　二日の弐

（図・略）

夫婦の縁をむすぶことは家相續のためなれバ相應を守るべし分限といふにハ



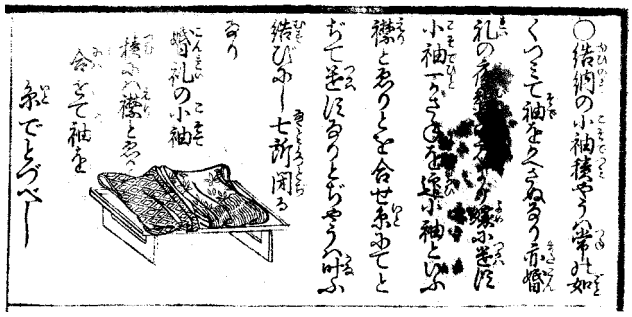
一二オ・上段

品あり見合と云ふも強ち
に美目容ちのミ見合す
るにも有まじ夫相應の
所作を見合べし費なく
共過分の事ハせず余り倹
約もふ相應なり只妙なる
事ハ分限をまもるにあり 二ウ・上段
縁談の仲人ハ大切の勤なり
媒の云ことハ双方の定規なれ
バ或ハくせ或ハ持病其外一失
有をも包まず語べし仲人
ハ何によらず僞飾る事を云
ず実氣に取結ぶときハ子々
孫々永久の橋渡しと末々
双方の悦び大かたならず是誠
の仲人と云べし嫁と成身は
幼稚より両親の心盡しをお 二オ・上段
もひ遣て
務むべし熟縁
成ざる時ハ其心盡し一時
に消行事勿体なし此事を
忘れず舅姑に孝をつくし

夫を大切にすべき事肝要也

二ウ・上段

○結納の小袖積やうハ常の如
くつミて袖をかへさぬなり亦婚
禮の夜聟の方より嫁に遣す
小袖一かさねを迎小袖といふ
襟とゑりとを合せ糸にてと
ぢて遣すなりとぢやうハ叶ふ
結びにし七所閉る



なり
婚禮の小袖
積にハ襟とあり
合せて袖を
糸でとづべし『三オ・上段
迎小袖積やう　歌二首
〳〵婚禮の小袖を
臺に
積ときは
腹を合せて
横にこそ積め
婚禮の小袖積には忘れても
袖をかへさぬものと知べし
小袖閉やう
針二本糸に付二本とも下より
上へ通し叶ふ結びにとむるなり
針をかへす事をいむことなり
此外ことハにもかへすさるいぬなど禁哉』三ウ・上段

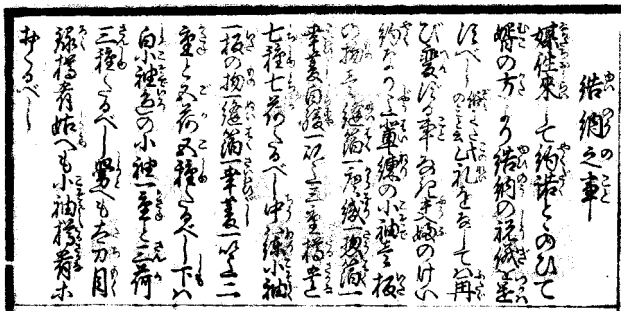
（図、略）

結納之事

媒往來して約諾と、のひて
婿の方より結納の祝儀を遣
すべし俗にたのミと云此禮をなしてハ再
び変ずる事なき夫婦のけい
約なり上輩練の小袖は板
の物は縫箔一更織一摠箔一
幸菱白綾一以上三重樽肴
七種七荷たるべし中ハ練小袖
一板の物一縫箔一幸菱一以上二
重と五荷五種たるべし下ハ

『四オ・上段

白小袖色の小袖一重と三荷
三種たるべし舅へも太刀目
錄樽肴姑へも小袖樽肴等
おくるべし



四ウ・上段

興請取渡しの事

其當日の夜兩家の
老長互ひに出て婿
の門前に席を

敷設け興を
居双方祝
言婿の方の
復人うけ取
なり 貝桶有バ興の次に
長立たる人請
取渡しあるべき也
○門の内左右にて
陰陽の火をたき是

を庭松明と云陰の松明たけ
五尺卅六所を束ぬ或ハたけ三尺六寸巻目十二ともする也」五オ・上段
陽のたいまつ長五尺束ね二十八あるひハ二尺ハ寸まき目九ツともするなり
輿の通る妻戸の前の左右に男女
兩人宛臼を置て餅をつくなりその
中を輿を通し頻て左方の餅を
右方の臼へはたと打こミ突合する
を打合の餅と云是をちぎり餅と称じて祝ふことなり上代ハこの餅を三こんにも色直しにも用ひし也扨妻戸の際の
左右の蠟燭を燈し居て是を
輿のとほりし迹にて左方を右方
へ渡ししんと〳〵を合せて消を紙
燭さしと云是等の事ハ高位の
人の執行ひ玉ふ禮にて平人の式
にハあらず

打合儀式之圖」五ウ・上段

（図、略）」六オ・上段

（図、略）」六ウ・上段

夫へ女の持參物の事

嫁より婿へ土産なり小袖一重
熨斗目子筋すじ糸にてこれも叶結びに閉る也上下一具上帯一下帯一
扇一本
たとう紙
七くミ刀
五くミ
腰一以上七
種の土産
といふ亦五種の土産もあり小袖上下扇刀
たとうがミ各廣蓋に積なり夫よ
り以下ハ分限に應じ差略有べし

」七オ・上段

本式饗膳之圖

（図、略）『七ウ・上段

○二重臺之圖ならびに手掛之圖

三宝に香立餅三枚中に三枝の松を立

四方ゑび一ツ宛を

立髯にべに

の

糸を

たるゝなり松の下にハ栗柿たちバな

向ふの方にハ鰯二ツ紙に包ミをくなり

餅の切口にハかやうの實に金銀の箔を押

糊にて付るなり

下の臺に

ハはぜ

或ハ米をくなり

○高一尺二寸六角にもる巻するめかま

ぼこ焼等結びのしいりこ串貝間々

檜の葉に金銀の露を打てさすなり』八オ・上段

三ツ盃瓶子置鳥置鯉之圖

（図、略）『八ウ・上段

○本式高盛引渡之圖

（図、略）

銚子提之圖

（図、略）

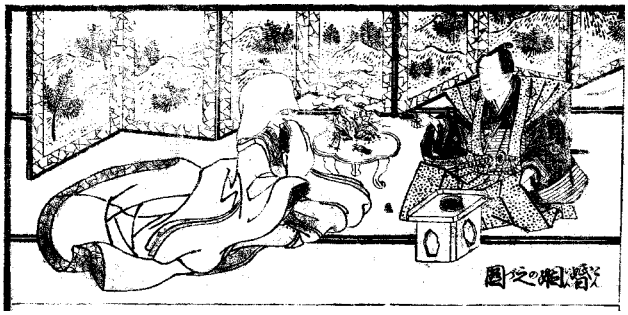
古法白紙白

元ゆひなり當

世ハ銀紙銀水

引をもちゆ』九オ・上段

婚姻之圖



○本式高盛打躬之圖『九ウ・上段

（図、略）
○本式高盛腸煎之圖
色直小袖の圖
（図、略）
帶をおもひ
結びに結
ぶ圖のごとし

上蔦出立之事

〔十オ・上段〕

下に白小袖幸菱の白小袖白ねり
袷のかづきを着るなり坐に付て
ハ被をこし卷にすべし
夫婦道具かざりの事
女の道具ハ前日物に心得たる女
中を嫁の方より差越て飾らす
べし夫の方の道具ハ其内の婦女
たち前日より飾置べし
三盃膳部等上輩の次第
兼て床に二重手掛饗の膳せ
きれいの臺蓬萊の臺置等置
鯉瓶子三盃銚子提を飾置べし
偖待女蔦出迎へて嫁を化粧
の間へ誘ひ衣紋など繕ひ坐鋪

〔十ウ・上段〕

（図、略）
本色七五三等盛圖
（図、略）

〔十一オ・上段〕

に具して夫婦坐定まりて先手掛
を出し待上蔦目出度挨拶して夫
婦に熨斗昆布堅栗を取て進
すべし偖おとなしき女房二人出
て飾りたる瓶子を一つ宛とつて下

坐へ下る又酌取二人銚子提を取て是も下坐へさがるべし偖瓶子の女蝶を取て仰向におき酒を提へうつし又男蝶を取て女蝶のうへに低向てかさね同じく提へ酒をうつし偖提より銚子へ能程に移して銚子提の酌我前に構えて待なり此時引わたし出て夫婦と待上臈に居べし本酌三盃を夫のまへに持參す「十一ウ上段夫上の土器にて二献のミ此時提より銚子へ酒を加ふべしこの夜の酌むすびと云ハこゝにさておつといつこんくハある事なり偖夫一献加へて以上三献なり其外を嫁の前に持參す

嫁も三献のむくハへのしな前の如し始終嫁の傍にかいしゃくの女房居ってさかづきを取りてまいらせなど心を添べし左なくバ待上臈の内より此かい酌をすべきなり偖其土器を下へ重ね初の如く床へ直すべし其時打躬を出し引渡しの右の脅に居て又酌人三盃を取て嫁の前に持さんす嫁上に有第二の盃にて三献呑夫にさす夫其盃にて三献のミて又土器を下にかさぬ此ときの酌のむすびを中のむすびと云へり酌また三盃を本坐へ置てしさるべし爰にて腸煎を出し」十二オ上段

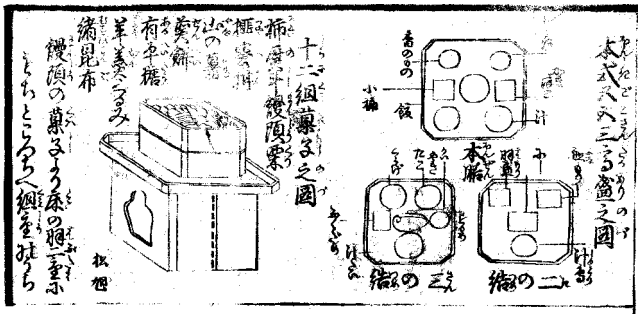
本式五五三高盛之圖

（図、略）

十二組菓子之圖

柿熨斗饅頭栗

榧□□

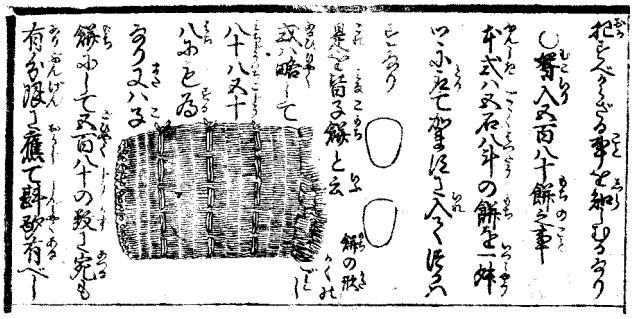


山の薯
煎餅
有平糖
羊羹くるみ
緒昆布
饅頭の菓子より床の羽二重に
もちとこつちへ組重のうち
引渡しの左の方に居へ酌また
三盃を取て夫の前に持參す
夫上に有第三の盃にて三献
のミ□ハへの事前と同じ此ときよめ
本酌大むすびと云ふ事あり嫁は指
嫁三献のミて納るなり酌人盃
を本坐へ直し引渡し打躬
腸煮ともに引下夫ハたつて
居間に入くつろぐべしその
□□□の吸ものを出し待上蔕
つぼねなど献々あるべしこのとき
一ツ□□てのせ三寶にすえて出すなりかハらけ
□□□□□出すとり□肴も有べし この
一献過て色を直し色なほしの小袖
おとなしき人持出る紅の幸びしの小袖一重
同じく帶一すし廣ぶたにつミて出す嫁ハ則
此小袖を着嫁ハ嫁の土産夫婦坐に着
の覺斗目に改むるなり
て雑煮吸物を出し金銀の盃」十三オ上段

『十三ウ上段

二ツ高砂の嶋臺に居へ銚子ひさ
げも金銀の蝶に替献々の式
あり待上蔕立て押への肴を出
し夫婦に參らせ偖式法の湯
漬を出し鮒の吸もの酒も間
をし塗盃たるべし爰にて饗
膳の會釋あり偖十二組の菓子

茶抔出其次に七五三またハ五五三等の本膳夫婦待上臈へ盃臺肴臺を出し右の圖六通りを夫婦待上臈へ居ゆる式終りて床に入しむ是ハ高位の規式にて中々平人の倣べき事に非す爰に記すハ凡ハ分限を犯すを以て罪の甚しきとすれバ斯の如き事ハ高位の事と知りて犯すべからざる事を知しむるなり



○婿入五百八十餅之事

本式ハ五石八斗の餅を一升ツヽに取てかますに入てつかハすなり

是を皆子餅と云

或ハ略して

八十八五十

八にも爲

なり又ハ子

餅にして五百八十の数に宛も

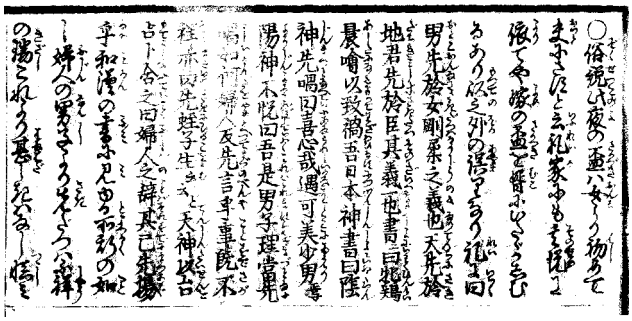
有分限に應て斟酌有べし

○俗説此夜の盃ハ女より初めて

夫にさすと云禮家にも其説に

依てや嫁の盃を婿にいたゞかしむるあり以之外の誤りなり禮に曰

男先於女剛柔之義也天先於地君先於臣其義一也書ニ曰牝鷄晨鳴以致禍吾日本神書曰陰神先唱曰喜心哉遇可美少年焉陽神不悦曰吾是男子理當先唱如何婦人反先言乎事既不



祥亦曰先蛭子生云天神以台
□□□□□□□□□□□□□□□
占卜合之曰婦人之辭其己先揚
乎和漢の書に見ゆる所斯の如
し婦人の男子より先だつハふ祥
の瑞これより甚しきハなし愼ミ
て俗説の非禮に順ふことあるべ
からず上輩にハなき事なれども

鹿人土俗の家にハ其夜嫁と
待上萬其外の者にハ皆膳部
を調へ婿の膳部ハこしらへずして
膳濟て後婿を呼出し嫁の盃
を戴すあり淺猿き風俗是悲
の沙汰に及ばず此夜ハ夫婦合
体の初め子孫永久祝する嘉
宵なるに一方□て膳部を拵え
天に譬る夫を無ものにし嫁
斗を珍客の如くあしらふハ此上
のふ吉ハ有じかやうの俗説を
忌除きたゞしき禮式に順ふ
べし